

金毘羅
利生記

花上野墓の石碑

一七

四つ目

忠実義経

〔解題〕 天明八年八月廿一日から江戸の肥前座で興行。作者しば芝叟・筒井半平、補助寛侯多藏・玉木筆二。

田宮小太郎の復讐事件を仕組んだ作。小太郎の父田宮源八は讃岐丸龜の生駒家に仕へて田宮流の劍術をよくしたが、同藩土堀源太左衛門に暗殺された。小太郎は幼にして江戸に出て柳生飛騨守に就て劍道を修め、十八歳の時官許を得て寛永十八年歸藩して復讐の素懷をとげて、名聲をあげた。諸侯の招聘を辭して江戸に出て、壯年にして病歿したとも、或は上野山内觀成院で自刃したともいふ。その碑は上野櫻木町の青龍院内にあつたが、今は天王寺の墓地に移されたといふ。

始めて劇に仕組まれた時は明かでないが、寶曆三年七月十五日から大阪の角座で「幼稚子敵討」の外題で興行されてゐるのなどは早い方であらう。淨瑠璃では明和元年七月十五日から竹本座興行の「敵討稚物語」が始めである。近松半二・竹本三郎兵衛の作で、荒筋はかうである。丸龜の藩士民谷新左衛門が堀口五左衛門に暗殺されたが、その妻お時と娘お梅一子小太郎の三人が復讐を企て、千辛萬苦の末、遂に金毘羅權現の利生と紀州の侍矢流加島の後援とによつて本望をとげるといふ筋で、外題に「金毘羅御利生」と角書をつけてある。

本曲はこの改作である。田宮坊太郎は父源八が深く契つた品川の遊女其朝との間の子であつた。源八が森口源太左衛門に暗殺された後、同藩士榎谷内記の情で丸龜家の菩提所志渡の方丈に預けられ、敵に油斷させるために偽啞となつてゐたが、坊太郎は忠實な乳母の身を捨てゝの祈願と金毘羅權現の擁護とで武藝が上達し、品川

松坂屋に二度の勤めをして居る母を訪れ、その手邊によつて敵を搜索し、遂に青柳左島の後援で素懷をとげるのである。初演の時の正本は、第一箱根湯元の段、第二八幡普請場の段、第三丸龜の段、第四志渡寺の段、第五碑文谷の段、第六八丁縄手の段、第七品川宿の段の七段迄であつたが、翌寛政元年二月、八九十の三段が補足されて、目出度く敵討をとげる大團圓となつてゐる。こゝに収めた志渡寺の段が最も名高い。

へ泣くく立つて行く。跡見送つてらせの爲か。サア奥様の仰せの通り。と思ひの外。猫に追はれた鼠同然。イヤ菅の谷はッ暫し。しをれて居たりし意地悪の森口殿。定めて負けと思ひのはや。驚き入りましてござるテへ、が。身腹分けねど育つれば。それ程外。ヤアと言ふより旦那様。俄にがたへ。コレコレハどうした御挨拶。にまで可愛いものか。そなたのその親く震ひが來て。竹刀持つ手も定まらず。二打ち三打ちその跡は。しどろに内記殿も聞ゆる達人。畢竟時の張合ひ切が。届かいで何とせう。長者の捧ず。二打ち三打ちその跡は。しどろに内記殿も聞ゆる達人。畢竟時の張合ひげし萬燈より。僅か貧女の一燈が。百なつて森口殿。勝に極まり鼻高々。ほと申すもの。スリヤ何内記殿。互の勝負倍ましたる未來の手向。草葉の陰の兄に悔しう存じます。地と聞くよりは時の運。團右衛門殿只今の龜相。ま様がさぞ悦んでござんせう。調嬉しう菅の谷口惜し涙。物をもいはず一間のつびら御免下されて。必ずともにお心ござる恁い爰から拜んで居るぞやと内駈込む向うへ。源太左衛門。はつと猶にさへられな。地と面にかざる仁義の伏拜む手に露涙。ッしかゝる所へ奥庭豫ふその内に。つゞいて内記弟子方丈。詞。針を含みし内心と。察しながらもより。息もすたく腰元信夫。御注進ッ各々座席定まれば。團右衛門進み腹慙に。詞コレハ。痛み入つたると手をつけば。詞ム、あわたとしき注出で。調扱々先生きついお手際。音に御挨拶。武藝未熟のこの内記。なかく進とは。森口殿との立合ひ。夫の勝を知聞えし内記殿。定めし手ごはい立合ひ貴殿のお相手とは。存じも寄らぬ事な

がら。主命しゅめいは非なく今日の仕合ひ。イヤ
る行儀しとやかに。フシまた押下つて
と首筋取つて引据ひきよゆる坊太郎が袂たもとよ
モ。面目次第もござりませぬ。地と互
畏る。内記は盃改めて。調然らば何
り。桃はなは零こぼれて二つ三つ。それはと立
に卑下ひげはありながら。善と惡とは見て
取る方丈。調イヤ／＼。勝つも負くる
も時の運。差出がましき事ながら。只今
までの如く水魚すいぎょの因よみ。それが即ち殿
への忠義。意恨いこん残らぬ印しるしの盃。ナニコリ
ヤ坊太郎。申し付けたる銚子さしこ盃。急い
で是への地聲ぢこゑの下。豫かねて用意の三方長
角さんげなかく立て。調ヤア憎にくい小悴。内記殿へは
柄。持つて出でたる小坊主の。おとな
しやかに控ゆれば。源太左衛門じろり
と見て。調この小兒こゑこそ噂うわさに聞く。民谷
源八げんぱが悴せと見ゆる。幸ひの酌人しやくにん。コリ
ヤ小悴。是へ參つて酌致せ。イヤ内
許うちより。ハテ扱あて。申さば古參ふるさんの其
許。平に先づ貴殿より。左様ござら
ば。たつて申すも却つて無禮。何れも御
免下されい。地と取上ぐる盃へ。酌す
かる無禮。以後の見せしめ覺えよ。地
いつにない夫の有様。病ひの業わざか。障

に従ひ。屋敷へ歸り休足致さん。ナニ
方丈。今日はいかい御難作。イヤ何内
記殿。お先へ参る。是はしたり。まだ震
うてござるか。コレ、御内證。ソレ。
薬でも進ぜられい。ア、片腕とも思ふ
内記殿はアノ臆病。最早武藝一通りに
於ては。凡そ日本に。楯衝く者はなき
源太左衛門。武士たる者はあやか様。
随分と機嫌を取り。稽古出精召された
がようござる。ひよつと機嫌のとり様
が悪いと。殿であらうが。どなたであら
うが。ヤ又どいつであらうが。打放し
て他國いたす。さすれば天照太神が。
天の岩戸へ籠つた様なもので。讃岐一
國は。常閑となり申すム、ハ、ハ、ハ、
ノ、ハ、ハ、ハ、程に。氣をつけて勤め
さつしやれ。ハ、委細承知いたしてご
さる。この數馬十藏も。臆病師匠を破門
いたして。其許と師弟の契約。直ぐに固
め。の盃は。お屋敷にて仕らん。然らば一
所にドリヤ。お暇申さうか。堀と飽迄
高ぶる高慢我慢。門弟引連れ森口は。
フシハミ。惡口たらん。立歸る。堀無念
と思へど詮方も。内記が傍に差寄つて。
堀是申し。今の惡口聞かしやんしたか。
お前は悔しうないかいな。堀と押動か
せど正體も。詞なければ方丈制して。
堀コレ奥方。内記殿をば客殿へ。同道
あつて御介抱。坊太郎は乳母お辻。
堀よきにとばかり跡言はず。内記が心
計りかね。堀はる昔の谷方丈も。オクリ
打連れてこそ入相の。フシ花は昔と散
失せて。今は老木の乳母お辻。思へば
思ひ廻す程。恐ろしや稚氣に。盗み心の
付いたるは。如何なる天魔の魅入れぞ
と。顔打守り。フシ暫し。涙にくれ
けるが。堀コレ和子。エ、こなたは
は。此の寺の名物。殿様へ御献上の濟まぬ
内は。方丈様はおろかな事。觀音様へ
も上げぬげな。堀サハリに。頑是がな
いとて。こなたは今年でもう七つ。
は分ちはないかいの。方丈様の手前。
内記様御夫婦の思はく。おりや恥かし
うて。コレ。顔さへもよう上げ
なんだわいの。堀その邪な心から。父
御様の非業の最期。無念とも思はしや
らぬ。不孝の罰が身に報ひ。生れも付
かね不具者。啞となつたに氣が付かね
か。堀母御は賤しい傾城と素性あらは
す今日の時宜。コレ人間と生れては。只
一心の置き所。賤しうても汚うても腹
は借物。こなたの父御は誰あらう民谷
いたして。其許と師弟の契約。直ぐに固

調さう言ふこなたの心と知らず。このきその風情、フシ目もあて。られすいち、敎して下され。地さうとは知らず色々乳母が明暮に。旦那様の無念の御最らし。地何思ひけん坊太郎。白砂をに。恥しめたはエ、何事ぞいの。調元期。おのれ敎を詮義して。討たさんもの。掻きならし。かくと仕方。乳母おをいへば盗人の。悪智恵つけたもやつと思ふ内。啞となつたるこなたの業病。辻。涙拂うてつく。眺め。調何書か。ばり此の乳母。思へば。これ程に。藥祈禱も利かばこそ。詮方つきて當國しやる。何ぢや。エ、父様が死なしや。地賢い智慧を持ちながら。何故果報つ。の。金毘羅様へ立願かけ。病氣といひ立つたを忘れはせぬ。口惜しい。又。たないぞ。父御が此の世にござるなら。て本心は。金毘羅様へ火の物斷ちに食桃を盗んだは。先きに。伯母様へ乳母が馬の稽古よ學問よと。座敷の内もお手事を斷ち。果物に命をつなぐ此の乳母話には。おれが病ひが苦になつて。米車。乳母も衣裳を著飾つて。ちよつとが。清き體を犠牲に。その病ひを治しても。粟も食はれず。果物に命をつなぐ出るにも。徒士若黨。美々しい行列あ給はれと。地祈るお辻が誠の心。稚心。と言つた故。ひよつと。われが死なうるべきに。調小僧よ。く口穢う。にわかるなら。どうぞ心をため直し。かと。それが悲しい故。つい桃を取つ森口づれが足にまで。かゝる憂目は調コレ紙一枚塵一本。人様の物盗むやうな。さもしい心止めて下されヤヤ。たのも。われにやらうと思つた故。も。地何事ぞ。現在母御はありながら。三コレ見やしやれ。こなた故に此の乳母して。くれい。ナホスヤア。それ。よく。親御に縁薄き。こなたがが。地元の姿はどこへやら。たとへ檻なら桃を盗ましやつたは。アノ此の乳母いとしうござるわと口説き立て。穢は纏うても心を錦になぜ持つて。父母にくれうと思つてかアノ此の乳母わつとばかりに。フシ敷きしが。地はつ御の敵討畢せ。名を上げうとは思はずに。オ、よう盗んで下さつた。と心を取直し。調オ、それよ。よしなかと恨みつ泣いっ様々に。五臓を絞るなう。オ、可愛の子やと。地引寄せて。い歎きに時移る。乳母が命は權現へ捧血の涙息も。たえ。斷食に。心苦し抱きしめ。調コレこらへて下され。げし犠牲。この和子が業病を。一度

本復なさしめて。本望^{ほんぼう}遂げさせたび給へ。南無象頭山金毘羅大權現^{なむざんとうさんこんぴらだいこんげん}。一金凝つては髪逆立ち。眼血^{まなこ}ばしるッ有様に。坊太郎は只うろくくと。背撫でさするを見向きもせず。豫て嗜む^{たしな}守り刀。抜けは秘妻逆手に取り。ぐつと突立て引廻せば。驚き絶る坊太郎が顔打守り打眺め。詞サア物を言はつしやれぬか。南無金毘羅大權現^{なむこんぴらだいこんげん}。サア物を言はつしやれぬか。南無金毘羅大權現^{なむこんぴらだいこんげん}。誓をかけ。命を断つて願うても。やつぱり物が言はれぬか。扱は金毘羅權現も。見放し給ふか。ハア。扱はつと力もお乳の人。呆れて詞なかりける。詞サアくお辻。そちが誠心相届き。權現納受あつたるぞ。地と一間を出づる樋谷内記。菅の谷もろともかけ出でて。詞そなたの誠は届いたぞや。コレ氣を確

かに持ちやいなう。コレナウ是と地抱^{かへ}を直ぐに腹帯と。心を添ゆる介抱に。ヤアくくそんなら物が言はれるか。おろか内記は聲はげまし詞ヤアくくかいなう。乳母よ。堪忍してくれ。城悟故十方空。南無阿彌陀佛^{なむあみだぶつ}。坊太郎。今こそ赦す暇乞ひ。乳母が冥と地わつとばかりに泣出す。詞オ、よ途の餞別に。引導せよと地樋谷が詞。う言うて下さつたなうくく。ホ、地聞くより坊太郎合掌し。詞迷故三界悦びは尤も。口留めなし置く仔細とい



ふは。五ヶ年以前三月十八日。國府八幡を掛け。三七日の斷食。艱難辛苦も子の敬討。首尾よう仇を討ちし後。其の幡造營の節。我も社參と馬場先を通り水の泡。イヤ。そなたの誠心。正名は空仁大徳と。道德末世に咲匂ふ。花かゝりし鳥居前。血に染む死骸心得ず。しく金毘羅權現納受あつたるし。の上野の片ほとり。古蹟を残す石碑の。と。改めみれば民谷源八。雨無三寶と。その譯知りし我々夫婦。坊太郎に敵を。フシ譽れは今にいちじるし。お辻は思へども。はや敵は逃失せられたれば是討たせんと。密に屋敷へ引き寄せ。教苦痛も打忘れ。詞エ、有難や奈なや。念非もなく。もし手がかりもあらんかと。へる武術もさすがは子供。忘れし事も願届きし此の世の本望。只不審なは内提灯の明りにすかし。よく／＼見れば多かりしに。地心得ぬは此の程より。記様。日頃に似合はぬ今日の立合ひ。オ箒にて。とぐめをさすが敵の抜目。ま武術の覺え智慧才覺。大人も入ればぬ發オそれこそは。森口が日頃の振舞ひ。源た坊太郎かくてあるならば。根を斷つ明は。不思議。／＼と言ひ暮す。日數八を討つたる者。正しく彼れとわが黒て葉を枯さんと。親ふ者もあらんかと。も丁度三七日。詞そんなら私が此の命。星。わざと勝を譲りしは。死んだる民谷此の寺へ預け出家となし。詞を制して捨てたが功に立ちましたか。オ、立つへ寸志の情。靈夢に任せ青柳家の奥儀啞となし。たとへ如何なる事ありとも。たとも／＼。疑ひなき證據は。まさ／＼を傳ふそれ迄は。足を留めたる我が計此の内記が赦す迄。必ず物をいふまじの蒙る夫の靈夢。軍術の聞えある。東國らひ。未練と見せしも拵へ事。ヤアヤと。教へし詞守り詰め。そちが最期の青柳家へ。坊太郎を送られよと。見ア。わが腹心の門弟たる。數馬。十藏。急今までも。扱こそ啞となつたるぞ。地し正夢を幸ひに。東の母にも巡り合ひ。いで是へ。地はつと答へて庭の面。木と始めて明かす榎谷が本心。フシ天晴コレ。此の箒の偏を以て。首尾よう敵を陰を出づる二人の弟子。内記が前に頭れなりける武士なり。詞スリヤ是まで討つた後。必ず出家得道して。地乳母を下げ。詞仰せに従ひ森口が弟子とな此の和子が。啞と見せしは拵へ事か。が亡き跡亡き父の。菩提を吊へとくれつて胸中を。探る靈の妙藥は壽命をのさうとは知らず一心に。金毘羅様へ祈／＼も。伯母が詞を守つたる。この稚ぶる藥とも。心のつかぬ源太左衛門。

